

昭和五十七壬戌年十一月

萬松禪寺略緣起



(上下) 新客殿



開山勅謚圓光大照禪師尊像

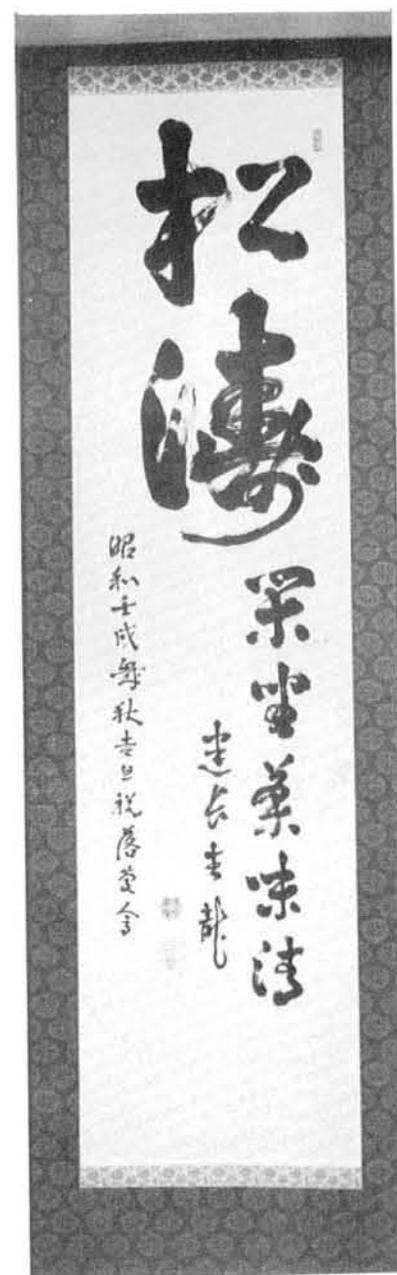
海老名市龍峰寺開山木像に依り新たに彫造(昭和56年)



開山塔



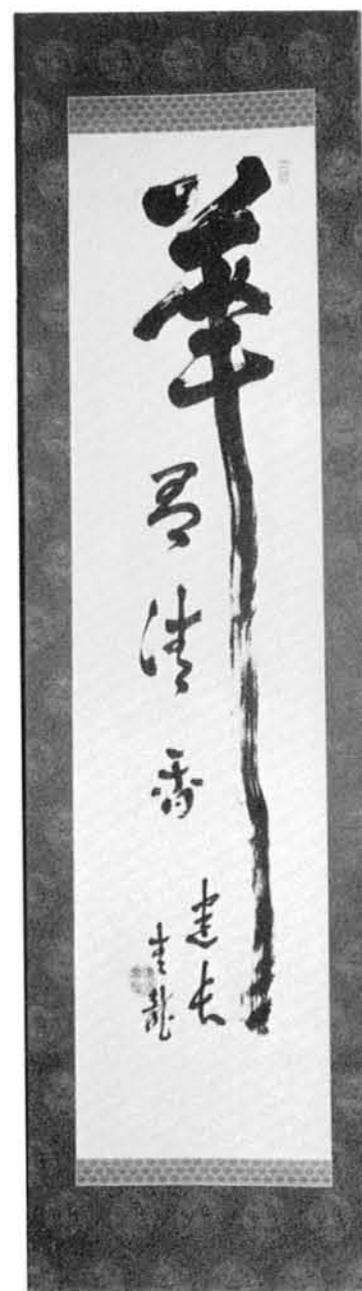
臨濟宗建長寺派管長
青龍窟中川貫道老大師猊下御揮毫



臨濟宗建長寺派管長
青龍窟中川貫道老大師猊下御揮毫



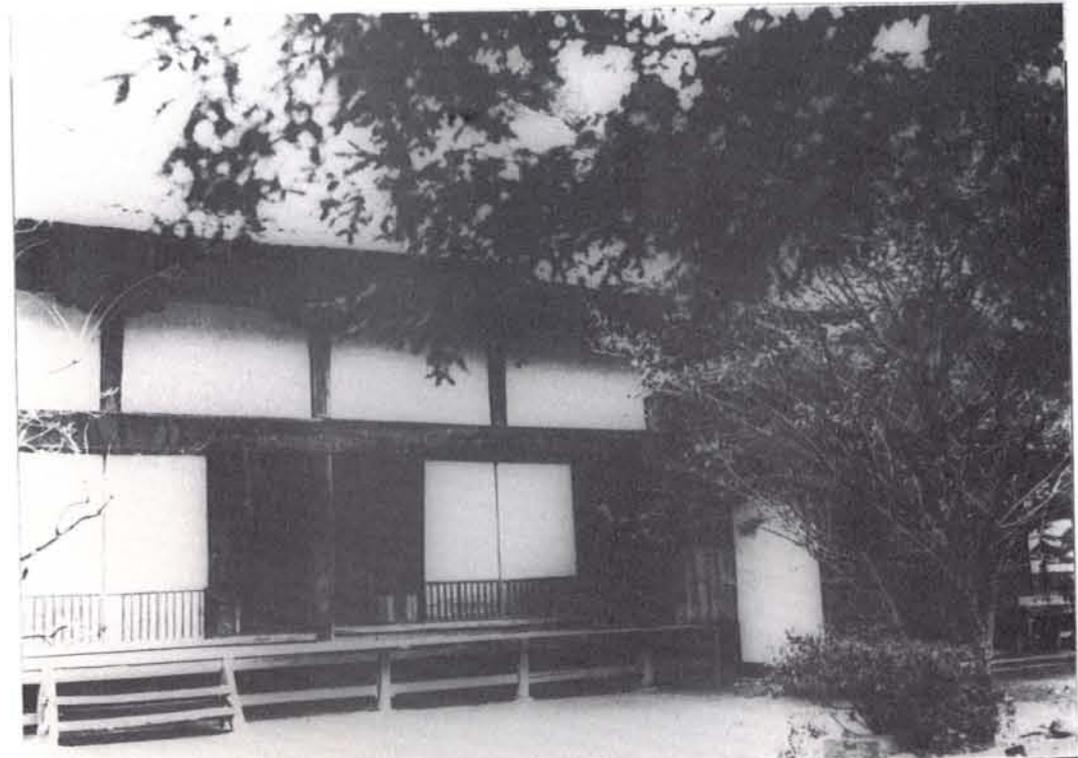
妙興寺専門道場師家
無位室挾間宗義老大師御揮毫



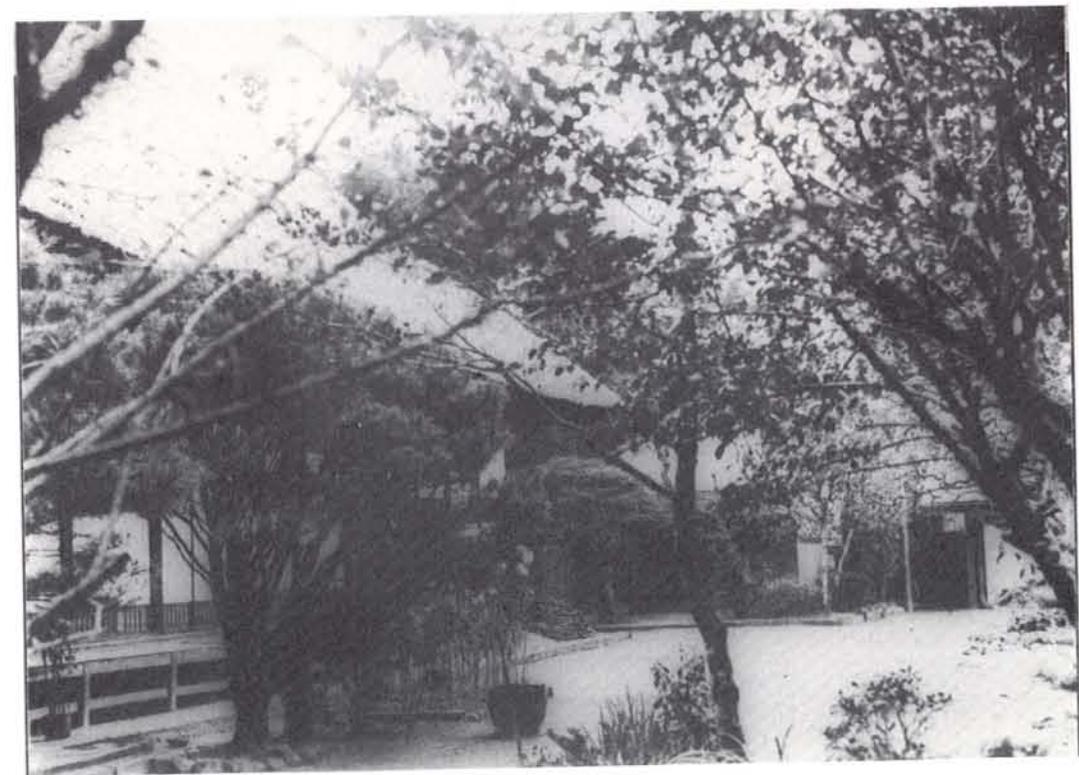
臨濟宗建長寺派管長
青龍窟中川貫道老大師猊下御揮毫



戦災後建立された仮本堂ならびに仮客殿



「小野郷学」の額の掲げられていた戦災焼失以前の本堂



戦災焼失以前の庫裡

多摩の百年

第1部 悲劇の群像

34

元徳三年(一三三〇)に建てられたという臨濟宗松茸寺(町田市小野路町)は、丘陵にはさまれた低地の森の中にある。明治初期、一帯は小野路村といわれ、周辺三十四カ村で組織された組合村の寄り場(集会所)であった。このころは神奈川県に

属している。

●教育による人間づくり

明治四年九月十八日、その方針を松茸寺の本堂に「小野郷学」として、肉太な筆が揮き込まれた額がかけられた。取り付けたばかりの額を見上げる野津田村(現町田市

野津田町)の年寄石坂源四郎(のち石坂信孝)の胸中にはど

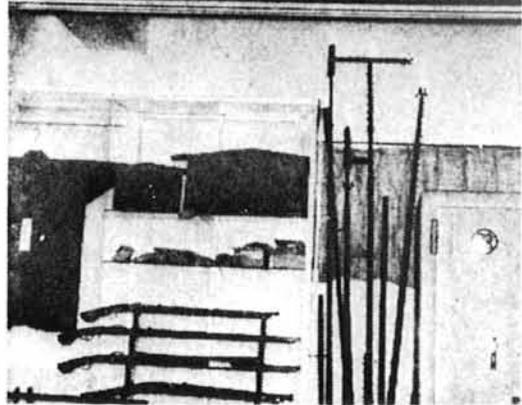
んな感慨が湧きあがっていた。か、やがて多摩自由民権運動の巨頭となっていく源四郎は、このとき三十一歳。村きつての豪農であり豪傑だった。彼は上野での義塾の経験を自警して「これからは教育によって人間を作っていくかなければ……」と痛感したを伝えられている。

「小野郷学」は、そうした意図を実現しようと、小野路村とその周辺の村人のために設けられた最初の教育機関だった。

郷学の設立は新政府の意を受けた県の方針であった。この年の一月、神奈川県から村に来た源四郎は、名主たちに勸告を説くかわら、郷学設立を勧めている。「教育による人間づくり」を意図して

いた村の指導者たちに宛てて書かれた。小野路村とその周辺の村々から集まった村役員が集まり、設立協賛である「掛巻同盟」(会頭・石坂源四郎)を結んだ。同年一月二十八日、まず野津田村(現町田市野津田町)

万松寺に掲げられた肉太の「小野郷学」の額は、いま小島資料館に保存されている



「金は出す口出すな」

自主独立

の集議に学校を開いた。翌年が始まったのは二月五日だった。

●開講までわずか20日間

以来、この学校は毎月五日の二十日の月六回、開講する。一トタイ人方式による。教員は、講するまでわずか二十日間である。その入江トドよりからは、小山田町)大嶺寺、小野路村、教育熱が燃え上がった。意気

込みがひしひしと感ぜられる。しかも額は、学校開校を助めるから、設立から運営にいたるまでのすべての費用を「掛巻同盟」とりあわせて支出する。金については、知らん顔を通じた。

一方では、運賃についてあれこれ口を出そうとする。この時、石坂は「学校にいての金は、是非で一切をまかなうから、郷学に一切をまかなうから、小島味とくたんかを切っている。金は出すから口は出すな」。自主独立の意図を掲げたを裏の権威たちの白眉はどろろかかわれるのだ。

●豪農の氣迫ひしひし

万松寺に最初にかつられた「小野郷学」の額は、いま町田市小野路町の小島資料館に保管されている。小島家の三十三代目主、為政は学校設立に石坂らと共に力を尽くし、教師をも勧めた。いまも空気にけられては、「小野郷学」の額の伸び伸びと躍動する筆跡からは、何ものにも干渉されず、自分の志を遂げるまで下げない意気

萬松寺本堂に掲げられた「小野郷学」の額

(昭和50年8月2日朝日新聞に掲載)

(額字は横本 義孝氏)

日本の近代学校の出現は、明治五年の「学制」制定に属するが通説である。その前の「小野郷学」をはじめとする各地の郷学校は、幕閣下の寺子屋とも「学塾」以後の小学校とも性格を異にしている。郷学校は

多摩の百年

第1部・悲劇の群像

もどき、新政府の教育政策が獨立する以前のものである。それだけに官儀制を受けることは少なく、各村々の郷校を中心とした住民たちによって、自主、自由な教育が行われていた。しかも、江戸時代の寺子屋とは違い、教員村の代表や有志

の手で設立されたのだから、共同的な性格を持っている。わずかな期間ではあったが、郷学校には「国の教育権」が現実には行使されていた。

●村政に欠かせぬ学問

「小野郷学」の教員は時期的な変動はあるが、通貫三人であった。教育内容は、「孟子」「中庸」「論語」などを中心とした漢学主体のもので、洋学を教えた形跡はない。教育体系には、郷学校を實質的に取り切っていた豪農たちの思慮が、色濃く投影されている。

会頭石坂重四郎をはじめとする「拱範園」の役員たちは、村きこの財源持ちであると同時に、漢学の素養を身につけた当代のインテリだった。

解放の風潮を憂う

教化の思想

うんのをきわめた、三三三の。日々の生活に追われる一般の層とは違い、労苦すること、よい生活の安定のうえに、教化し、習俗の一斑を知らせ、村に豪農たちの多くは名主や頭頭などの村役人も兼ねていた。文字や説文は、村政行上も必要欠くべからざるものだった。

●色濃く朱子学の影響

「小野郷学」は、儒教による「孝悌を教え、仁義を説く」と、「孝悌を教え、仁義を説く」と、習俗の一斑を知らせ、村に豪農たちの多くは名主や頭頭などの村役人も兼ねていた。文字や説文は、村政行上も必要欠くべからざるものだった。



山中の自然に恵まれた万松寺。豪農たちの思想の伝達所であった。町田市小野郷町の万松寺谷戸（ヤシ）で

る名主は嘆いている。一揆には共済するような勘辨ならぬ農民たちであれば、村の支配層にとっては、その教化は一層の急務とも感じられていた。

●思案された隣藩だけ

「小野郷学」には、江戸時代から種々なが通い始めるものになった。が、「すべて郷土の子を教育する」という設立の目的を達成するのは、幕閣下の自由な連立は、やはり、郷学校へ連立は、やはり、思案された村人だった。（題字は橋本農夫氏）

「小野郷学」に開放した萬松寺境内

(昭和50年8月3日朝日新聞に掲載)



万松寺のカヤ

町田市小野郷三丁目、臨濟宗萬松寺。榮隆院住持五三の版本堂前にある大木で、樹元が幹が二に分かれ、高さは約二十丈。目通り周囲は太い方が三・一五丈、細い方が二・九丈。樹齢は約三百五十年と推定されている。同寺は江戸時代の藩学者林



今に残る戦争の傷

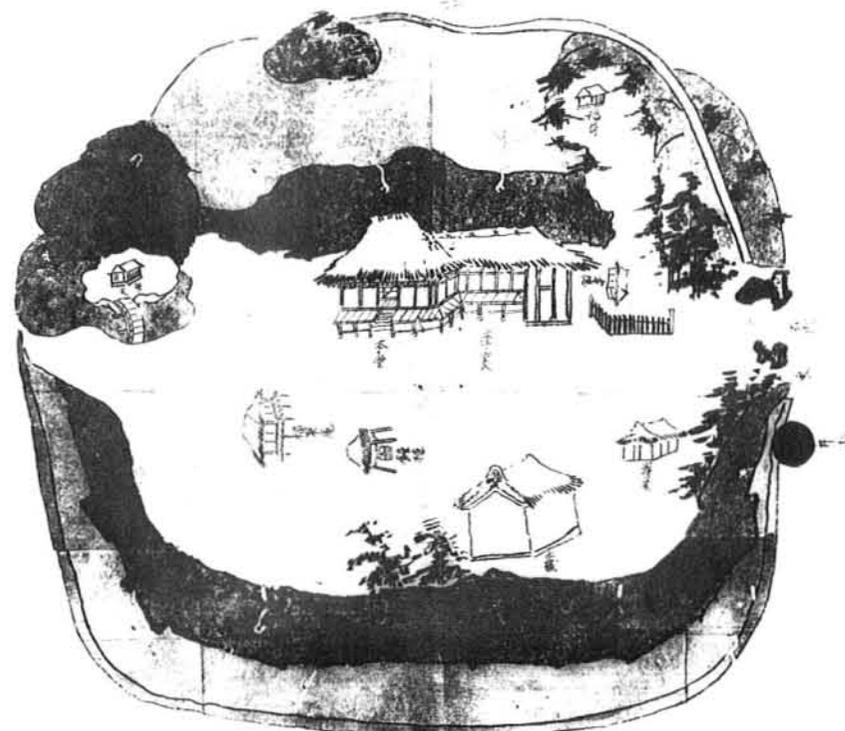
にある。上のカヤの大木も皮が剥けた。木周囲の木の皮が焦げた。暑い焼死したが、今では付着の丘跡からキツキツやヤブなど、が訪れ、その鳴き声が時おり聞こえるとい

榎（町田市指定銘木）

(昭和50年12月2日読売新聞に掲載)



参道の石仏群



境内約坪数三千六百坪也
 本堂 横六間 縦七間半 但二方重天
 庫裏 横五間 縦拾貳間
 福聚堂 横五間 縦四間
 鐘樓 一丈間半 四方
 辨天堂 七間半 四方
 稲荷社 三丈四方
 土藏 横六間 縦三間
 卷下 横一丈半 縦三間
 雪隠 横一丈 縦三間


 此也野道
 此也山
 此也水
 此也北
 此也南

寛政貳年 十月

武蔵野多摩郡松山町
 萬松寺

萬松寺古図 (小島資料館所蔵)

[寛政2年(1790年)当時の萬松寺境内]

武列多麻郡小野路村東光山萬松寺
中ノ八郎大助門致御代官取
 一新御山朱印壹通七石貳斗寺中山林共
 外御年貢地田畑共六反
 一本尊樂師如來但古佛以外什物等
云云之仍示如件
 延宝七年己未八月日
普濟寺託堂 坊道代

当山十二世悦堂長和尚筆 (普濟寺所藏)

必思筆書行小野路村上候
 一、壬子二月、遠城下、赤坂、
 佛堂以清禮、之、之、之、之、
 抑後、再、病、死、位、以、中、法、
 之内、多、了、年、各、佛、堂、禮、不、
 系、仕、以、右、佛、堂、上、小、野、路、
 廿列路村
 萬松寺
 願筆
 亥十月
 普濟
 役者 禪師

当山十六世鶴林碩巢筆（普濟寺所藏）

必思筆書行小野路村上候
 一、今般王政漸新、意趣、之、月、世、有、行、方、
 主、義、之、言、宗、法、淨、院、法、後、師、別、行、
 權、家、之、族、之、所、由、之、板、橋、村、唐、松、寺、
 寺、堂、以、以、中、日、打、抄、功、條、上、之、且、其、
 為、度、中、之、當、村、方、淨、院、所、禪、宗、川、縣、
 流、裁、別、所、在、之、其、禪、宗、所、出、之、所、
 上、南、之、日、以、別、列、名、之、所、禪、宗、所、出、之、
 唐、松、寺、之、所、由、之、板、橋、村、唐、松、寺、
 一、別、之、名、之、所、由、之、板、橋、村、唐、松、寺、
 在、五、之、所、由、之、板、橋、村、唐、松、寺、
 明法二年二月
 普濟寺
 役者 禪師

清浄院檀家萬松寺へ讓渡古文書（普濟寺所藏）

目次

- 一、開山勅諭圓光大照禪師略伝……………一
- 二、萬松寺由縁略記……………二
- 三、武州多摩郡小野路村 小野山萬松寺略縁起……………七
- 四、世代略記……………九
- 五、附 記……………十

開山勅諡圓光大照禪師滅宗宗興大和尚略伝

禪師は第五十二代嵯峨天皇の第十二皇子河原院（源融）の後胤で尾州中島郡中島村（愛知県一ノ宮市萩原町中島）にあつた中島城主中島藏人の子である。延慶三年生まれ。諱は宗興、字は滅宗と号した。

禪師は中島郡矢合村にあつた円光寺で薙髪し柏庵宗意に師事し、柏庵が鎌倉建長寺天源庵に住すると大應国師を慕つてその門に入る。業成つて中島郡に帰り父寛阿、母勝観の恩に報いるため妙興報恩禪寺を創建された。その工事は貞和四年（一三四八）禪師四十一才の時より着工され、完成は十八年後の貞治四年（一三六五）である。その後再び関東を行脚して建立したといわれる八禅刹のうちの一つが当山である。このほか禪師は尾張・駿河・近江に接待院を開き、また熱田神宮の塀を修復し、尾張国分寺堂（永和元年）を建立したといわれる。

禪師は應安五年（一三七二）京都東福寺の首座となり、ついで龍翔寺住持として大應録を刊行している。晩年は妙興寺末の矢合村にある円光寺を愛して塔所も生前からこの地と定めて天瑞塔を作っている。いま円光寺の本堂左側にある土壇上の宝篋印塔が禪師の墓といわれている。なお禪師の創建であることが明らかにされている寺院は、神奈川県海老名市国分にある龍峰寺および同寺に併合された清水寺、愛知県稲沢市生和町の慈眼寺などである。禪師は永徳二年（一三八二）七月十一日天祥庵で示寂。七十三才。圓光大照禪師号は第一〇一代稱光天皇應永三十三年（一四二六）の勅諡である。

昭和四十年刊「妙興寺誌」には禪師の出自について次の如くしるされている。（前文略）「すなわち嵯峨天皇第十二皇子河原院（左大臣源融）の末裔の嵯峨源氏に属する人とされる。この嵯峨源氏の末流が何時の頃かおそらく平安末期ごろまでに尾張國中島郡に土着し、地名をとつて中島氏を稱するようになったらしい。古誌類によれば源融十三代目の子孫がはじめて左衛門尉宣長として尾張中島村を領知したと伝えているが確実な考証はできない。宣長は承久の乱に朝廷方となったので鎌倉幕府に所領を没収されたが愁訴の結果、延應元年（一一三九年）九月に屋敷田畑を返して貰ったことが「東鑑」に見える。

この宣長の子孫は歴代「藏人」と号していたので、禪師の父藏人が宣長から何代目の藏人にあたるかは不明である。禪師の生年延慶三年から比定しておそらく東鑑所載の宣長の孫にあたる人ではないかと思われる」とあり、

禪師の父母の墓として「張洲雜志」には

迎接院殿一奇寛阿大居士石塔 貞治五年三月十五日

十梅院殿慈海勝観大姉石塔 暦應元年三月二十九日

とあって、母勝観は禅師が妙興寺建築に着手した貞和四年より十年前に、父寛阿は建築落慶の翌年に歿していることがわかる。

なお中島氏は戦国時代の中頃、新たに勢威をもちはじめた斯波氏、織田氏などから、その所領を押領されて次第に歿落の運命を辿ったものと推定されるが詳しいことは分らない。そのうち今日では東京都中央区日本橋、茨城県行方郡玉造町、愛知県尾西市富田、大阪府枚方市岡新町などに後裔と稱する中島氏がいられることが「妙興寺誌」に記されている。

(参考、妙興寺誌 稲沢市史)

一、萬松寺由縁略記

「新編武蔵風土記稿」(文政十一年刊)第三巻には次の如く記されている。

村の西にあり。小野山と号す。臨濟宗芝崎村普濟寺の末寺なり。寺領七石の御朱印を賜へり。開山宗興、永徳二年七月十一日寂す。圓光大照禅師と勅諡せり。開基を覚翁等公と号す。寺僧の伝に等公は仙術を得し奇特の人なり。境内西の方涌出する水はかの旧跡なるをもって仙水と名づくなりと言へり。然れどもさせる證跡もあらざればおぼつかなし。(以下略)とある。

また「武蔵名所図会」には当山について次の如く記されている。「小名万松寺谷戸といふところにより。(中略)この寺の境内西の方に清水の湧出する小流あり。名付けて仙人水と云ふ。按ずるにここにて仙人と号しけるのは西行の「選集抄」并に「西行物語」にも載せたる武蔵野に仙人住みけるかと言ひし人なるべし。西行は鎌倉より武蔵野に出て奥州に起かんとて野辺に至るに道より五・六町も脇へ入りて読経の声を聞いて尋ねけるに年齢九十有余の人、法華経を読誦すること七万部なり。もとは郁芳門院の北面の侍なりといふことを載せたり。その人の住みける地にて仙人水といふはその人の阿伽の水を汲みし清泉の遺跡なるべし。」とある。

この清水はいま俗に「小町井戸」と呼ばれて早魃の折にも湧き水の絶えたことがない。その井戸一帯の山林は、地続きの

小野路城址とともに当山の所有地であったが、現在は東京都が「自然環境保全地域」として管轄し所有している。

当山の開創は鎌倉時代元徳二年、開山は勅諡圓光大照禅師滅宗興大和尚である。本尊は薬師如来。

開山滅宗興大和尚は幼にして尾州中島郡矢合村にある円光寺で薙髮、大應国師を追慕して建長寺に入り柏庵宗意(神奈川県綾瀬市吉岡にある濟運寺の開祖)に師事、修行を了へて郷里に帰り妙興寺の創建に着手したのち再び関東に遊び八禅刹を建立したといわれる。当寺がそのうちの一寺であることは当山開山塔銘にも刻まれている。当寺は滅宗興が創建したのち破壊されたといわれ二世龍山和尚が、降つて第十世北榮和尚がそれぞれ中興していることは、その卵塔の銘に明らかであるが、その年代や事由などはわかっていない。

(一) 中世

中世から近世にかけての当寺の寺院経済、布教活動などについては時代が戦乱期で大きく揺れていたので全く不明である。

(二) 徳川時代

徳川三代将軍家光公の慶安元年(一六四八)住持八世喜叟座元代以来代々将軍家より御朱印七石を賜わっている。寛文年間(一六六一―一七二)第十一世祥翁喜和尚のとき失火により焼亡、古記録を失したことが立川市普濟寺所蔵の古過去帳に記載されている。文政十一年(一八二八)林述齋編の「新編武蔵風土記稿」には「本堂八間半に六間、南向き、本尊薬師如来は木の坐像、高さ一尺五寸ばかり」とあるが今は焼失して存しない。

(三) 明治時代

明治二年(一八六九)神仏混淆分割に際し、当所小字馬場にあった真言宗清浄院が廃寺となったため、その檀徒のうち四十四戸が当寺に入檀を認められている。また同四年(一八七一)には本堂が「小野郷学」の教場となり村民および近郷住民の教育機関に利用されている。

(四) 大正時代

大正十二年(一九二三)九月一日関東大地震のときには本堂が傾き鐘楼 土蔵などが倒壊している。

(五) 昭和時代

昭和初期には本堂を修養道場として郷土の青年子女の一夜講習のために開放している。昭和十八年には天明五年の銘のある梵鐘が太平洋戦争遂行のために供出させられて今はない。同二十年(一九四五)五月二十五日夜半に、米国爆撃機の帝都空襲の際に焼夷弾多数を投下されて山門土蔵を除き、本堂庫裡玄関物置および什物書籍類一千余冊をすべて焼失した。焼失した堂宇のうち本堂は寛文年間以降の再建によるもので建坪六三坪余、木造茅葺、庫裡は建坪八二坪余、木造茅葺、その大黒柱は櫓の角材でひと抱えにはできない太さがあった。玄関は建坪六坪、垂鉛板葺であったが何れも建立の年代が詳らかでない。

たまたま当夜本堂には集団疎開による東京都品川区鈴ヶ森国民学校児童職員寮母ら約五十名が、ここを「学寮」として使用し起居していたが被災と同時に全員無事に岩子山干手院に避難している。同二十四年十二月十日、先住昌道和尚が寺族および檀信徒の浄財を基金として仮本堂(建坪十四坪、木造垂鉛板葺)を建立。のち当市小山町宝泉寺に祀る同寺末正源寺の本尊薬師如来、脇侍日光、月光両菩薩、十二神将を勧請し安置している。同二十五年三月三日官有地であった境内地八二坪ほどが大蔵省より無償譲与となる。同二十八年六月二十三日、宗教法人「萬松寺規則」が認証される。同二十九年(一九五四)先住昌道和尚、仮客殿を建立する。同三十八年(一九六三)十二月現住持、私財を寄進して庫裡を再建、翌年四月落慶法要を営む。同四十二年七月浴室増改築、翌四十三年六月井戸修理および排水溝改修、ついで同年八月、境内前庭にコンクリート工事を施し砂利を敷き込む。同四十四年二月、山門屋根改修、ついで倉庫を改修し車庫を併築、同五十二年(一九七七)四月、当所字平久保、萩久保両地区の檀徒十七戸、団地造成工事の必要から、その墓地移転がきまり檀徒の遺骨安置のために納骨堂を仮本堂西寄りに仮設する。同五十三年九月、寺有地の一部が東京都より「自然環境保全地域」に指定されたのを契機に、その地域内にある寺有山林一反三畝歩ほどを東京都へ売却。本堂客殿の再建資金に充

てる。同五十四年九月三日、横浜市港北区日吉町七ノ六、株式会社天野工務店との間に本堂建築契約を結び建立工事に着手。同年十二月一日、東京都より募金許可を得て檀信徒を対象に仏像仏具莊嚴購入募金を始める。同五十五年(一九八〇)七月二十四日、天野工務店との間に客殿建築契約を結び工事に着手。同年八月四日本堂上棟式厳修、同年九月、物置一棟解体、その跡地に仮安置所および倉庫一棟(仮設)を建て本尊薬師如来および仏具を移動する。同年十月、仮本堂および仮客殿を解体撤去する。同五十六年(一九八一)二月九日不動堂宇の建立に着手、同月十五日、客殿上棟式厳修、ついで境内造園整備工事を始める。(第一期)同年五月十九日不動堂宇完成する。露坐の不動尊像一体を遷座奉安し供養する。同年七月末日、仏像仏具莊嚴購入募金終了。同年八月二十日、本堂並に客殿が竣工する。同年十二月境内造園整備工事再び始まる。(第二期)同五十七年(一九八二)五月境内造園整備工事すべて終了。ついで境内に灯笼一对、門標、記念碑などを建てる。同年十一月三日、開山六百遠年諱小斎会および本堂客殿落慶略法会を厳修する。

一、山号

当山の山号はいま「小野山」であるが、ふるくは「東光山」と号していたことは「元和辰二年九月建長寺末寺帳之写」に「東光山萬松寺」とあり、また延宝七年(一六七九)八月、当山十二世悦堂和尚が普濟寺北堂和尚宛に記した文書にも「東光山」とあるが文政十一年(一八二八)刊「新編武蔵風土記稿」には「小野山と号す」と記載されているので、少くとも十七世紀ごろまでは東光山の山号が用いられていたと見てよい。

三、現況

現在、境内地八二坪、本堂五十八坪、木造銅板葺、客殿四十一坪、木造瓦葺、庫裡四十五坪、木造瓦葺、山門一坪、土蔵十四坪、倉庫八坪、老樾(町田市指定銘木、樹高十九米余、幹周三米余)

四、古記録類

- ・武州多摩郡小野路村小野山萬松寺略縁起一冊(寛延元年仲冬 十五世天外碩源和尚筆録)
- ・水帳畑方書抜帳(文化四卯年十一月)一冊

- ・小野山萬松寺明細取調書一冊 (明治二十五年十一月 二十二世昌道碩隆和尚 筆録)
 - ・萬松寺所有地及付屬管理地明細取調書 一冊 (明治三十三年八月調 二十二世昌道碩隆和尚 筆録)
 - ・御朱印狀 写 九通 (御朱印箱付)
- なお古文書としては十二世悦堂、十六世鶴林、十七世弘道、二十世順崇各和尚署名のあるもの計七通、他に萬松寺名もの一通、隣寺法類名を併記したものの二通が本寺普濟寺に伝存する。

五、鎮守・石塔・石仏群

当山鎮守として境内地の東方に北野天満天神、西方に弁才尊天、南方に白山大権現、北方に稲荷大明神を祀つてあるが由縁は未詳。なお境内、参道および墓域に、石仏十八基、墓塔十基、供養塔五基および板碑二基が伝存する。

六、開山塔銘

師姓源嵯峨帝之皇子河原院後胤尾州中島城主中島藏人男入圓光寺薙髮依相州濟運柏庵和尚受業嗣法建長大應國師歸尾陽創妙興再遊關東建八幡刹當山其一数也再歸尾陽永徳二壬戌年七月十一日湛然示寂春秋七十二勅諡圓光大照禪師塔曰天端也爰天明改元辛丑正当師之四百遠忌拜請尾陽塔下堅土塔于萬松乾隅之峯矣

鶴林碩巢謹誌

七、萬松寺梵鐘銘

抄録

大日本國関東路武蔵州多摩郡小野路邨小野山萬松禪寺者伝言等公仙去遺跡藥師出現靈場也勅諡圓光大照禪師東関遊歴之日鎔光于此慕道之縑素鼎新練若稱開山始祖矣星霜代謝天元年辛丑七月十一莫伏値四百遠年之忌辰預計自他檀門欲鑄鐘不圖遇凶歲以故延在今乙己冬遂鑄一口以上酬慈恩云云

維時天明五龍次乙己黃鐘念一莢

中峯二十世法孫

現住當山 鶴林碩巢謹誌

武州多摩郡小野路村小野山萬松寺略縁起

それ当寺本尊藥師瑠璃光如来の由来を尋ぬるに、その昔一人の仙人、虚空より飛び来り、山の峰に靈水を湧出せしめ、その辺に住居す。時の人さらに知らず。ある時、里人彼の仙人を見て恐れて近づくことを得ず。彼の仙里人を呼び近づいて語つていはく、この水はこれ人間最上の薬水なり。一切の病は、この靈水を呑むときは諸病悉く愈えずといふことなし。七々四十九日まで呑みて愈えざるは、これ即ち定業の病なりと。知るべし外病は癩病諸瘡眼耳病などは或ひは洗ひ、或ひは呑み信心堅固なる時は病苦悉く除きて身心安樂を得べしと速かに語り給ふ。里人事を聞きて近里の病者に語る。病者即ち教へに随つて或ひは呑み或ひは洗ひて病苦悉く除く。諸人不思議の思ひをなす所に彼の仙人、何時となく失せ給ひてただ一箇の薬師如来の尊像あり。里人堂を建立しその内に安置し奉る。水はこれ仙人の加持し出だせる水ゆゑに仙水と名づけたり。説に天竺の無熱地を表はすと云ふ。中ごろ人皇五十代桓武天皇の御宇延暦九年庚辰歳夷国より悪鬼ども来りて、この山を奪取して近里を悩ます処に田村將軍、延暦二十年辛己歳九月八日の夜中に悪鬼どもを追ひ払ひ再びこの山を取り返し、東夷は武蔵野に引き退きこの山に將軍と御前と二度逢ひ給ふ。殊にこの所にて綸旨頂戴あり。なほまた御前をば留め置き奥州まで攻め下り、東夷悉く追討し立ち帰り給ひ、この山にて大利を得る。殊に綸旨頂戴の地なるゆゑ、御前の願にて東方守護天下安全のため直ちに伽藍建立し給ふ。將軍ならびに御前深く薬師如来を信仰し給ひ、平等上人を住ましめ、夷国より永く悪鬼の襲ひ来ることなからしめむがため御祈祷これあり。その後小野小町、悪病を請け、朝下を退き京近き靈仏靈社に詣りて祈れども病苦印なきゆゑ、この山の靈仏仙水の徳を聞きて東国に下り、この山に三七日籠れども病苦さらに印なきゆゑ夜明けなば立ち出でむと思ひて薬師如来へ暇乞ふの歌あり。

南無薬師諸病悉除ノ願立テ身ヨリ佛ノ名コソ惜シケレ

と詠み、少し真眠り給ふとき夢幻の如くにて薬師如来の返歌あり。

時雨ハ只一時ノ者ゾカシ小町ガミノカサソコニヌキ置ケ

小町、夢醒めて後我が身を見給へば悪瘡少しく愈ゆ。

小町いよいよ信心堅固にして誓願を立て千日籠居し仙水を呑み或ひは洗ひ給へば悪瘡悉く平癒す。その後この山の麓に山賤と伴ひ三人子息を儲け給ふ。それよりこのかた又里となり小野小町村と号す。いつの頃よりか小野路村といふ。その後人王八十二代御鳥羽院の御宇建久三年壬子歳、征夷大将軍源頼朝公、この山の霊地仙水の徳を聞き給ひて、山の峰に城を築く。即ち工藤左衛門祐経に賜はり、寺をば外山へ移す。本尊薬師如来は霊仏とて御前鎌倉へ向ひ奉り守り本尊と深く信仰あり。即ち一寺を建立し仙水寺と名づけ給ふ。

年久しくして小野路城も滅し鎌倉の仙水寺も跡なく本尊薬師如来のみ残り給ふ。爰に大應国師の御弟子に滅宗和尚といふ人あり。姓は嵯峨天皇第十二皇子河原院の後胤、尾州中島城主中島藏人の長男なり。圓光大照禪師と勅諡して諱は宗興と号す。その後人皇九十五代後醍醐天皇の御宇、元徳二年庚午歳、大照禪師当寺を再建し鎌倉にある薬師如来の尊像も再び取り返して安置し給ひ寺をば東光山萬松寺と名づけ給ふ。その後当寺は村開闢の寺なるによりて小野山と号す。本尊薬師如来再び当寺に返し安置し奉ること今年まで四百三十四年になる。今に至るまで霊現奇特その数を知らず。殊に仙水の霊池、今に至りて城山の峰にあり。百日の早にもこの池乾くことなし。

城山を天瑞といふ。これ即ち開山の塔所なり。塔を天瑞塔と号す。今峰の大松これなり。俗に仙瑞と云ふは誤りなるか。元来仙人の住所なるに依りて然るべきか。この意後學眼を着けよ。

開山勅諡圓光大照禪師滅宗興大和尚の示寂は人王一百代後圓融院の御宇永徳二年壬戌歳七月十一日。今日まで□□三百八十三年となる。大照禪師当寺建立の後破壊す。時に龍山和尚中興す。今に至りて龍山和尚の諱名ならびに年号当月知り難し。後學意を着けて可なり。

右此の記東山前堂、大小檀越の白頭翁を近くに呼びて当時の往古を問答す。或ひは古書に対して、その大抵を伸ぶ。然りといへどもその書甚だ假名文字を加ふ。爰に延享三龍集丙寅孟正、予相陽において開山大照禪師の年号月日ならびに俗姓聞くことを得たるゆゑ、これを改め書きてもって永く後世に残すものなり。

茲時寛延改元龍集戊辰天仲冬吉祥日

小野孤頂現住源天外叟燒香三拜欽書

(この萬松寺略縁起は一七四八年当山第十五世外碩源和尚が筆録したもので現存する。筆者が原文を訓読して旧假名文で記した。)

世代略記

世代	道号	示寂年月日	備考
開山	勅諡圓光大照禪師	永徳二年七月十一日	(一三三二) 滅宗宗興大和尚。七十三。
二世	龍山興和尚	不詳	中興和尚 立川市普濟寺古過去帳に依る。
三世	壽翁浄和尚	不詳	
四世	香林詣和尚	不詳	
五世	鐵心印和尚	寛文四年四月十四日	(一六六四) 国立市南養寺十四世鐵心紹印和尚と推定する。
六世	實參貞和尚	不詳	
七世	實岩定和尚	不詳	
八世	喜叟悦和尚	元禄五年九月九日	(一六九二) 東京都西多摩郡瑞穂町福泉寺五世と推定する。
九世	源叟因和尚	□□□十一月五日	普濟寺古過去帳に依る。年号不明(欠損のため)。
十世	北榮壽和尚	寛文元年十月一日	(一六六一) 中興和尚、普濟寺古過去帳に依る。
十一世	祥翁喜和尚	元禄八年十一月二十日	(一六九五) この和尚代、寛文年間失火により焼亡古記録を失す。
十二世	悦堂長和尚	延宝七年八月以降	(一六七九) 全右。
十三世	東山日和尚	正徳五年七月十七日	(一七一五) 普濟寺古過去帳には「東山演公座元」とあり。
十四世	萬溪源和尚	延享三年五月一日	(一七四六) 全右。
十五世	天外碩源和尚	明和元年十二月廿六日	(一七六四) 七十六。当山石塔銘に依る。廣福寺七世。直筆「小野山萬松寺略縁起」が伝存する。
十六世	鶴林碩巢和尚	寛政四年八月廿九日	(一七九二) 六十三。当山石塔銘に依る。開山塔造立。梵鐘、殿鐘を鑄造。
十七世	弘道碩徳和尚	文化十三年四月四日	(一八一六) 普濟寺過去帳に依る。
十八世	衡州碩阿和尚	文政九年六月廿九日	(一八二六) 昭島市廣福寺過去帳に依る。
十九世	泉巖碩卓和尚	天保九年四月一日	(一八三八年) 町田市小野路町小島資料館資料に依る。
二十世	順崇碩温和尚	明治五年三月廿三日	(一八七二) 当山石塔銘に依る。
二十一世	陽道碩和和尚	明治廿九年三月廿八日	(一八九六) 四十八。全右。
二十二世	昌道碩隆和尚	昭和三十四年十二月十五日	(一九五九) 八十二。仮本堂、仮客殿を建立。

当山開山勅諭圓光大照禪師六百遠年諱にあたり寺史を調べ略縁起を整理しました。開山様については「妙興寺誌」に詳しいのでその概要のみを記しました。

拙山の開山様六百遠年諱のために、法務御多端の折山号額、門標、掛軸用にそれぞれ御揮毫して頂いた臨済宗建長寺派管長青龍窟中川貫道老大師猊下ならびに半折を下された臨済宗妙心寺派の妙興寺専門道場師家無位室挾間宗義老大師猊下に対しまして紙上を借り衷心より厚く御礼申しあげます。

紙面の都合により、ここには寺史の概略だけを記し掲げました。蒐集した資料でやむなく割愛したものもあります。

なおこの寺史調査に際し、貴重な資料を閲覧させて下さった本寺の東京都立川市普濟寺弓場重昌師および格別なる御協力を頂いた法類の東京都昭島市廣福寺白川宗昭師に深く謝意を表します。

今後諸大徳の御叱正を得てさらに不備を補足し、誤りを改めて拙山の由縁を明らかにしたいと考えています。

昭和五十七壬戌年十一月吉祥日

当山二十三世 現住 敬巖碩順誌